

記録
35ミリ
カラー／30分
日・英語版

■企画
文化庁

スタッフ

■製作・脚本・演出

村山英治

■撮影

金山富男

■音楽

山内 忠

■助監督

藤原道夫

■撮影助手

鈴木敏之

■解説

伊藤惣一

■出演

錐彫り： 宮原敏明

六谷進一

突彫り：長谷川重雄

道具彫り：

中村勇二郎

縞彫り： 児玉 博

糸入れ：城之口みえ

長板中形：

清水幸太郎

小紋染め：小宮康孝

文部省選定 第32回芸術祭大賞 1977年教育映画祭最優秀作品賞・
文部大臣賞 第32回毎日映画コンクール教育文化映画賞 1977年キ
ネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位 第21回日本紹介映画コンク
ール優秀作品賞 第33回東京都教育映画コンクール銀賞

この映画は、染めの型紙彫りの技法を丹念に記録し、手仕事人間
にとってどんなにかけがえのないものかを訴えている。



江戸時代から続く伊勢型紙の産地、三重県鈴鹿市白子、寺家の両町を訪ねる。江戸時代は紀州藩の領地で、町並みも古く、ここには型屋と呼ばれる型紙商人が多かった。職人集落の家の中では、型紙を彫っている人がいた。楮（こうぞ）の和紙を柿渋で貼り合わせる地紙づくりは、今でも女の仕事である。型紙は、この地紙を普通7～8枚重ねて彫る。その際、彫刻刀の刃の通りをよくするために、1枚1枚裏面に種油をひく。型紙彫刻には様々な技法があり、彫師はそのどれかを専門にしている。最も古い技法の「錐彫り（きりぼり）」「突彫り（つきぼり）」によって、江戸小紋などの粋で目立たない模様の美が作られる。ついで「道具彫り」は、様々な模様の形に刃先を作って彫る。「縞彫り（しまぼり）」は、型紙彫りの中で最高の技術だと職人仲間は認めている。

縞彫りの名人、児玉さんは「1寸幅に34本」という昔の人も引いたことのない縞数に挑戦していた。彫り終えた時、34本の細い紙が落ちるところが圧巻だ。残った型紙の細い紙が縄のれんのように動くのを横に糸をいれて固定する「糸入れ」。これは柿渋相手の息詰まるような手技である。彫刻刀も、和紙も職人にとっては生命で「紙をだましだまし彫る」という。染めの型紙は、幾度も染めを繰り返すとやがて紙屑として捨てられてる。しかし模様は武士階級の粋（かみしも）や江戸小紋等の模様となって長く残った。